

Alexander von Humboldtの アメリカの大学に与えた影響

佐々木 博

- I はじめ
- II フンボルトの生涯
- III フンボルトの業績の概略
- IV フンボルトとアメリカ合衆国
- V フンボルトのアメリカの大学への影響
- VI おわり

I はじめに

世界を代表する学術振興財団の一つにドイツのAlexander von Humboldt Stiftungがあり、「科学の帝王」・「近代のアリストテレス」・「最後の万能科学者」などの別称があり、通称「南米旅行」と呼ばれている全三十巻の「新大陸の熱帯地方への旅行」および「コスモス」の著者であるプロイセン生まれのアレクサンダー＝フォン＝フンボルトに因んで命名されている。彼は2歳年上の言語学者でプロイセンの外交官と行政官をつとめ、ベルリン大学創設者の兄Wilhelmの影に隠れがちであるが、彼はドイツでよりもむしろ外国で、とくに新大陸で有名である。

これだけの大科学者であるため、彼の生涯・業績・交友関係・人物評・評価などに関しては膨大な著作や論文が出版されている。フンボルト研究では当代第一人者であったHanno Beckの業績を筆者らは1986年に紹介したことがあった（佐々木・田村 1986）。Beckは膨大なフンボルトの研究史を跋渉し、さらにフンボルトと会話をした人の談話録まで編集している。

本論文は、フンボルトとアメリカ合衆国との関係の中で、当時は新興国であったアメリカの大学制度が、ドイツ流に改変されていく様に焦点を当てて、記述したい。資料は主に 1972/73年と1978年の2度、アレクサンダー＝フォン＝フンボルト財団奨学研究員として、ボン大学経済地理学教室にいたときに、財団から送られてくる報告書（Mitteilungen）・フンボルト生誕200年記念出版「Alexander von Humboldt業績と世界的価値」（1969 A. v. Humboldt財団）・先行論文、1972/73年当時ボン大学におられたHanno Beck教授直々にお話を伺ったことや、帰国後補足のお手紙を頂いたものなどである。

1959年4月24日、東京上野国立博物館でフンボルト・リッター没後100年祭が東京地学協会・日本地理学会共催で開催され、大学院修士課程2年生だった筆者も両者の著作を国立国会図書館（当

時 現在の赤坂迎賓館にあった）から借り出して、国立博物館の会場に展示するのを手伝った。地理学史の授業で聞いた程度の「コスモス」・「南米旅行」・「比較地理学」などの重厚な金文字で表題が刻印してある時代物の洋書の浩瀚を目にして、いつの日かこんな名著を読めるようになるだろうかと、興奮した。

1962-64年ドイツ政府留学生としてフライブルク大学に留学中、町の古本屋で「コスモス」と「南米旅行」・「自然の諸相 (Ansichten der Natur)」を見つけ、多少値は張ったが購入した。髭文字のドイツ語で書かれており、日本には数冊しかないであろうこの名著を自分が持てたことに欣喜雀躍とし、いまもって我が家の宝物となっている。京都大学初代地理学教授小川琢治（湯川秀樹の父）も「地質現象之新解釈」（1929年刊 古今書刊）で、「南米旅行の大著作は大正8年ライプチヒ市の一書店に露国貴族の家から出た完篇に近い一部を発見して之を購い得た。これは著者一生における最大の掘り出し物であって、幸いにその偉業を彷彿し得ることとなった。・・・」と、筆者同様の宝物を手に入れた興奮を88年前に書いておられ、小川先生が日本における南米旅行の第一号購入者と思われる。

この行事のために日本地理学会は「Humboldt Ritter 100」なる30ページの小冊子を作成し、在日ドイツ大使館文化部長Dr. Wilhelm Loer・渡辺 光・西川 治・辻村太郎・山岡政喜・長田新らが寄稿している。この行事に因んで古今書院の雑誌「地理」4巻3号（1959）はA. v. フンボルト特集で、野間三郎・西川 治・岩田慶治・八杉竜一・前島郁雄（「コスモス」序論の翻訳）の論文が掲載された。

薬学出身でドイツ文学に転じた大森道子が、フンボルト著「宇宙論的自然観」の序論と、ゲーテ書簡集内のフンボルト宛の手紙と注釈を1971年に翻訳し、11年後論説にまとめている（大森 1971・1982）。単行本では、亀山健吉が言語学者で外交官・行政官であった兄Wilhelmを中心に著述した「フンボルト」（1988年）を著し、ピエール＝ガスカル著・沖田吉穂訳「探検博物学者 フンボルト」が白水社から1989年に出版され、精神分析学に造詣の深い著者はフンボルトの精神生活や私生活を非常に批判的に描きだしている。

筑波大学では文部省特別助成金で、フンボルトの著作「新大陸の熱帯地域への旅行 (Voyage aux régions équinoxiales du nouveau continent, 1808-1834)」29巻、およびHelen Maria Williamsによる英訳「個人談話 (Personal Narrative of Travels to the equinocial regions of the new continent during the years, 1799-1804)」5巻の浩瀚を、1984年度に340.8万円で購入した。通称「南米旅行」と呼ばれる30巻の大著はパリで出版されたが、第4巻は計画はされたものの、出版されることはなかった。1970年よりこの大著は、アムステルダムのTheatrum Obis Terrarum社よりファクシミリで再版されて、筑波大学中央図書館に納入されたのは喜ばしく、一部をコピーして授業にも使用した。南米旅行のルートと探検旅行の様子は、ピエール＝ガスカルの著書と手塚 章の力作（1991・1997）に詳しく紹介されており、「南米旅行」と「コスモス」の一章ずつが手塚によって翻訳されている。

II フンボルトの生涯

フンボルト（正式には von Humboldt, Friedrich Wilhelm Heinrich Alexander）は1769年9月14日、ベルリン市中心部のイエーガー街22番地（Jäger Straße 22）で生まれた。父アレクサンダー＝ゲオルグ＝フォン＝フンボルト Alexander Georg von Humboldt はマルクブランデンブルク地方への入植者の子孫で、フリードリッヒ大王の甥である王太子の侍従で、陸軍少佐、大選帝侯の狩猟場であるテーゲル城を管理していた。大王・貴族らとともにフリーメーソンの会員となっており、会員がテーゲルの城に集まることもあった。祖父のヨーハン＝フンボルト Johann Paul von Humboldt が男爵に相当する世襲の貴族に列せられたが、ユンカーのような所領に住んでグーツ経営をやっていたわけではなく、新任の貴族で自由な発想をする人物であった。

母マリー＝エリザベート Marie Elisabeth は再婚で、最初プロイセンの大尉ホルヴェーデ男爵と結婚したが若くして寡婦となり、4才の男の子を連れ、ホルヴェーデ家の遺産を持参して、ゲオルグと再婚した。旧姓コロン（Colomb）といい、フランスからマルクブランデンブルク地方へ逃避移住してきたユグノー教徒の子孫で、父はボツダム近くでガラス工場を経営しており、母はスコットランド人の商人の娘であった。フンボルトの広い視野・国際性、科学と芸術に対する強い志向、会話や手紙に現れるエスプリなどは、プロヴァンス出身の母の血筋やスコットランドの血も混じっていることに負うものであろう。フンボルトは母語ドイツ語よりもフランス語で多くの著作を書しており、フランスの文学史家たちはフンボルトを自国の作家に入れているほどである。「フンボルトは半分ドイツ人である」と言われるのは、彼のこのような出自によるものである。

Rudolph Zaunick・大森道子訳は、フンボルトの生涯を1. 幼・少年期、2. 修行時代、3. 円熟期、4. 遍歴時代、5. 収穫期に区分している。1859年5月6日、ベルリンのOranienburger Straße 67で89歳7ヶ月の生涯を閉じるまでの長い生涯を、彼の業績と活動した場所との関係で区分すると、1. ベルリン修行期、2. 南米・アメリカ合衆国旅行期、3. パリ滞在期、4. 中央アジア旅行を含むベルリン・パリ往復期、5. 「コスモス」執筆ベルリン期に区分した方がわかりやすい。偉大なるフンボルトの生涯を一論文に収録することなど、とうてい不可能であるので、多くの先人の作成した年表の中から、本論文を理解するのに必要な年表を作成すると次のようになる。

フンボルトの年譜

1769年9月14日 ベルリンで誕生 Campe・Koblanck・Campe・Kunthの3人（1番目と3番目は同一人物）の家庭教師に教育される。

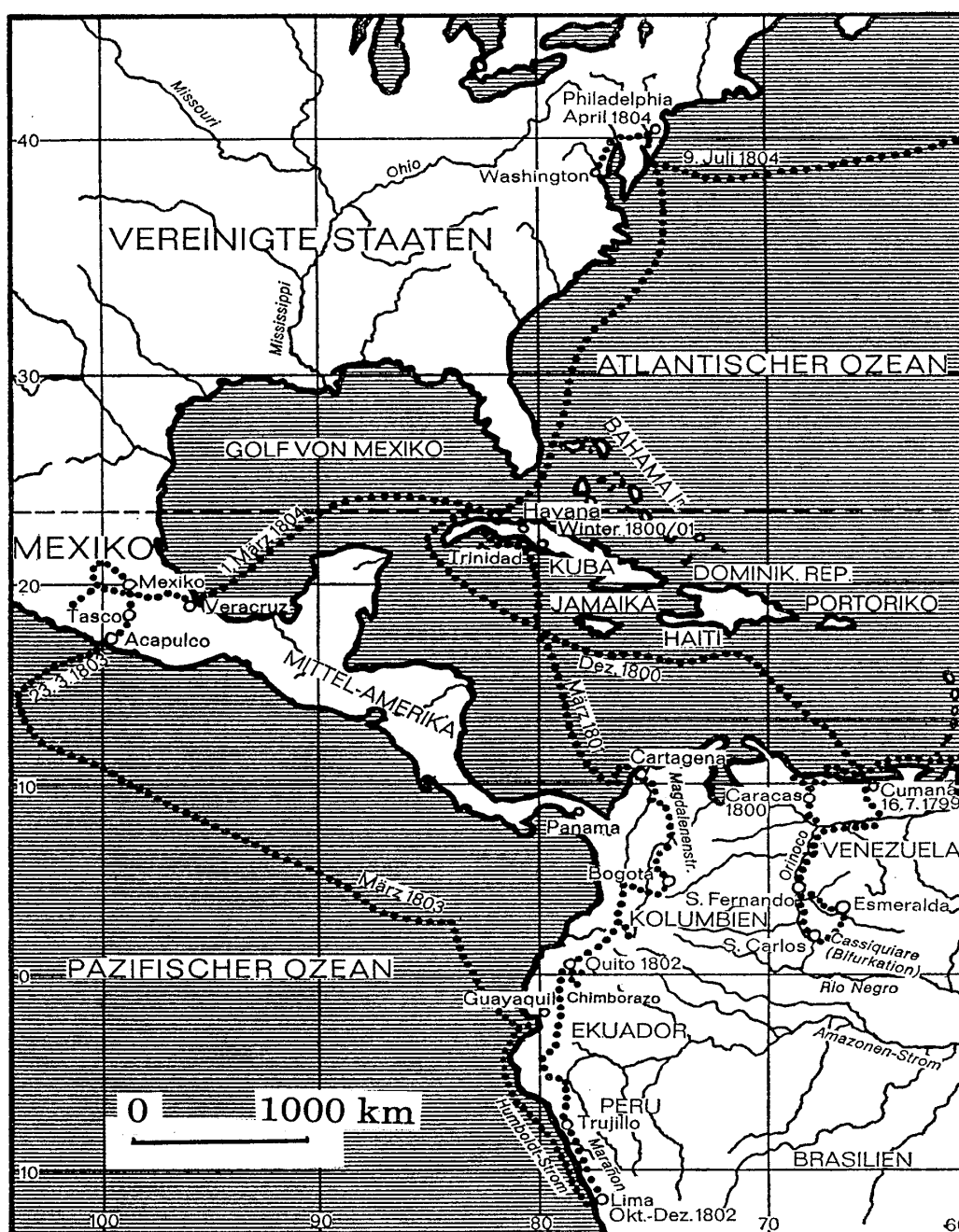
1779年 10才 父ゲオルグ58才で没。

1788－89年 18－19才 兄とともにフランクフルト a. d. Oder大学で、家庭教師Kunthが付き添って、冬学期のみ行政学を学ぶ。

1788－89年 19－20才 兄はゲッチンゲン大学へ去ったが、本人はベルリンで工芸学を独習し、植物学をベルリン植物園園長Willdenowに学ぶ。

1789－90年 20－21才 創設間もないドイツで最も近代的なイギリス流啓蒙主義の牙城ゲッチンゲ

- ン大学（1737年創立）でほとんどすべての理数科系学科を学ぶ。マインツでキャプテンCookと第2回世界周航に参加してきたGeorg Forsterと会い、オランダ人ファン＝ゴインス van Geunsとともにニーダーラインからオランダ・イギリスへ旅行、パリを経て帰国。フンボルト最初の著作「ライン河畔のいくつかの玄武岩に関する鉱物学的観察」を書きForsterに献呈。
- 1790－91年 21－22才 ハンブルクの商科大学へ転籍、簿記やスペイン語を学ぶ。ベルリンで植物学の勉強。
- 1791－92年 22－23才 ザクセンのフライベルク鉱山大学学長で水成論の旗頭Abraham Gottlob Wernerの下で鉱山学を学ぶ、プロイセン鉱山局官吏。
- 1792－1796年 23－27才 鉱山局上級監督官 1793年論文「フライベルクの植物」。
- 1794年 25才 イエナにいる兄ヴィルヘルムを訪問 ゲーテとシラーに初対面。
- 1796年 26／27才 ティロール・スイスアルプスへ鉱山学・植物学研究旅行 ジュラ山脈・フランスアルプスへ旅行。
- 1796年 27才 イタリアの物理学者ヴォルタを訪問、鼓舞されて「地下ガスに関する試論」を書く。11月19日ベルリンで母マリー乳ガンで55才で没、8万5000ターラーの遺産が入ることになり、その年間利子3500ターラーは鉱山監督官の収入の6倍にもなり、直ちに官職を辞し、移住の自由と南米旅行が可能となる。
- 1797年 28才 官職を辞しイエナの兄の元へ、ゲーテと自然科学の共同研究、イエナのローダーの下で解剖学研究、ドレスデンで天文学研究、ヴィーンで植物学、ザルツブルクでレオポルト＝フォン＝ブーフLeopold von Buchと共に鉱山学・古生物学研究。
- 1798年 29才 兄についてパリへ、卓越したフランスの学者達に強い刺激を受ける。研究旅行への願望高まる。エジプト行きを試みるが成就せず、年末4才年下のラロシェル生まれのフランス人海軍外科医で植物採集家ボンブランAimé Bomplandとともにスペインへ旅行。
- 1799年 30才 スペイン王より新大陸のスペイン領を自費で訪問する許可を得る。6月21日ボンブランと共にラコルーニャLa Coruña港からPizarro号で出航、5年間にわたる南米・アメリカ旅行、途中テネリーフェ島に寄航し、4000mに近いPico de Teyde火山に登り、植物相の垂直分布と自然条件との関係を観察、7月21日 ヴェネゼラのクマナ到着、11月21日 カラカス到着（地図1）。
- 1800年 31才 4月5日 オリノコ川水源地域へ探検、全長3000kmを小舟で移動、オリノコ川がネグロ川を経由してアマゾンに逆流してつながる自然水路「カンキアーレ」の存在を確認。自然のみならず民族・人間階層などをも詳しく観察、入植スペイン人の原住民・奴隷に対する態度に憤慨（写真1）。
- 1800－01年 31－32才 キューバのハバナからコロンビアのカルタヘナ到着 鉱山研究。
- 1802年 33才 6月23日 当時最高峰と考えられていたChimborazo火山（6310m）を5881mまで登る。フンボルト人類で最高峰に登った人間に、ペルー太平洋岸のトルヒーヨを通りリマへ 国立文書館で研究（写真2）。



地図 1 フルボルト 5 年間にわたる新大陸旅行のルート
(August Petermannによる1869年の地図)

1803年 34才 ガイヤキルからメキシコのアカプルコへ上陸、メキシコを横断して東岸のヴェラクルスへ。

1804年 35才 ハバナへ さらにアメリカ合衆国へ、5月20日フィラデルフィア着、50日間アメリカ滞在、その間ジェファーソン大統領はじめ各界要人と懇談、パナマ運河掘削を提案、6月12日ワシントンからフィラデルフィアへ戻る。フランス軍艦Favoriteがデラウェア州New Castleから出航するまでの2週間、お世話になった各位に礼状書き、フンボルトにとって夢を与え、自由な国で美しい国アメリカであることを伝えなかったことを後悔、7月9日ヨーロッパへ出航、8

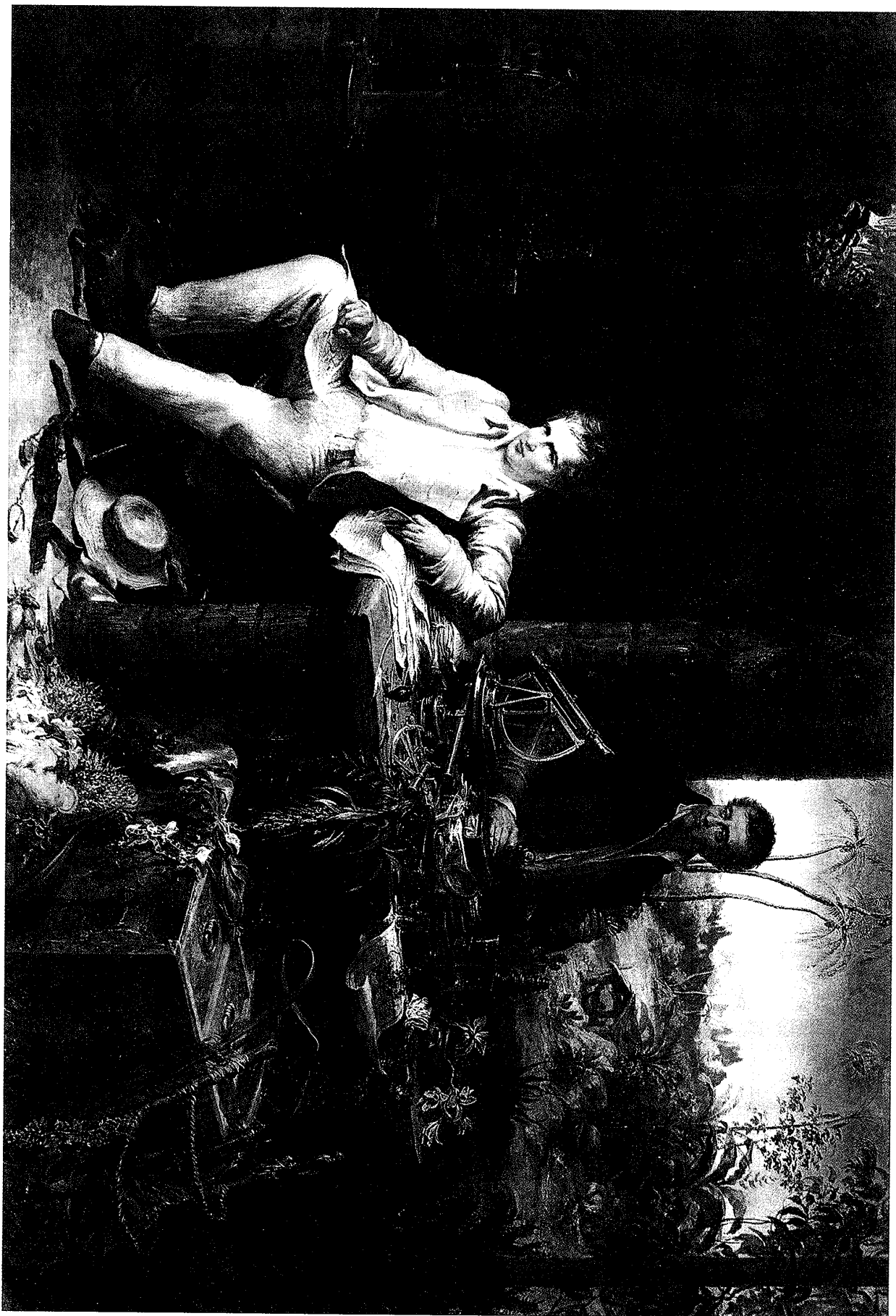


写真1 オリノコ川ジャングルでのフンボルト(左)とボソアラソ(右 ノートを持っている) Eduard Ender画 ベルリン科学アカデミー蔵

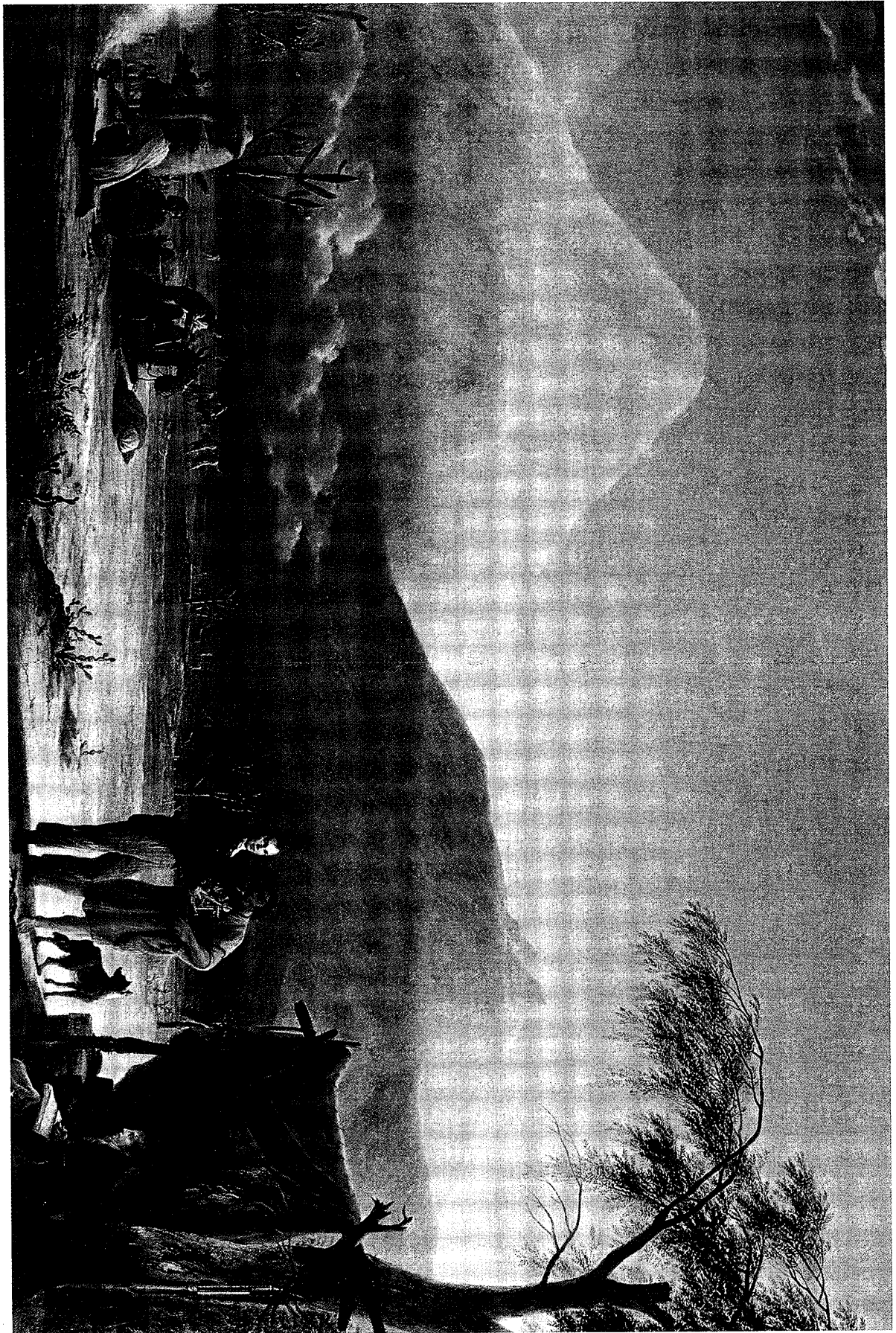


写真2 チンボラツツウ火山麓タピア高原のフンボルト(左)とボンプラッ(Friedrich Georg Weitsch 画)ボツダム国立Schlösser und Gärten蔵

月3日ボルドー着。南米から持ち帰ったもの木箱45個、6万種の植物・鉱物・土壌・動物・昆虫・蝶の標本、地図・数百枚のスケッチ・インディオの使用道具などなど、船旅は地球半周、陸路だけで1万キロの南米探検旅行、私財の1/3を使い果たす。

1804年12月 ナポレオン皇帝となる。

1805年 36才 パリで南米旅行の研究成果の整理を始める。プロイセン駐ローマ大使の兄を訪ね、ナポリのヴェスヴィオス火山を6回登る、11月ベルリンに帰る。「自然の諸相 (Ansichten der Natur, mit wissenschaftlicher Erläuterungen)」執筆開始。

1806年 37才 ベルリン科学アカデミーで講演、ナポレオン ベルリン占領、フンボルト フランスの占領圧力緩和に尽力、外交のため何度かパリへ、ベルリン大学初代学長フィヒテ「ドイツ国民に告ぐ」講演。

1808年 39才「自然の諸相 (Ansichten der Natur)」完成、ヴィルヘルム王子とパリへ外交交渉へ。

1809年 40才 ヴィルヘルム王子はベルリンへ帰ったが、フンボルトはパリに留まり南米旅行を執筆。

1810年 41才 ナポレオン、フンボルトに対しスパイのかどでパリよりの退去命令。

1813年 44才 ナポレオン、ライプチヒでの諸国民戦争で敗退。

1814年10月1日 45才 ヴィーン会議、兄Wilhelm次席全権として参加。

1815年 46才 南米旅行完成のため再びパリへ。

1822年 53才 プロイセン王の随員としてヴェローナ会議に参加 ヴェスヴィオス火山に3回登る。

1823年 54才 ベルリン、アカデミーで火山についての講演、再びパリへ。

1827-28年 58・59才 パリを去りベルリンへ、音楽アカデミーで「自然地理学」についての講演
1828年9月18日ベルリンで世界最初の国際科学者会議：ドイツ自然科学者・医者学会会議を開催し代表となる。スカンジナビア・イギリスなどから600人の科学者が参集。

1829年 60才 3月26日兄Wilhelm夫人カロリーネ63才で没。「閣下」の称号を伴った枢密顧問官に任命さる。ロシア皇帝の招待で4-12月、6ヶ月間、中国国境近くまで16,000kmをウラル・シベリアへ探検、1万2244頭の馬が使用され、658の宿駅を通過、53の大きな川を横断（地図2）。

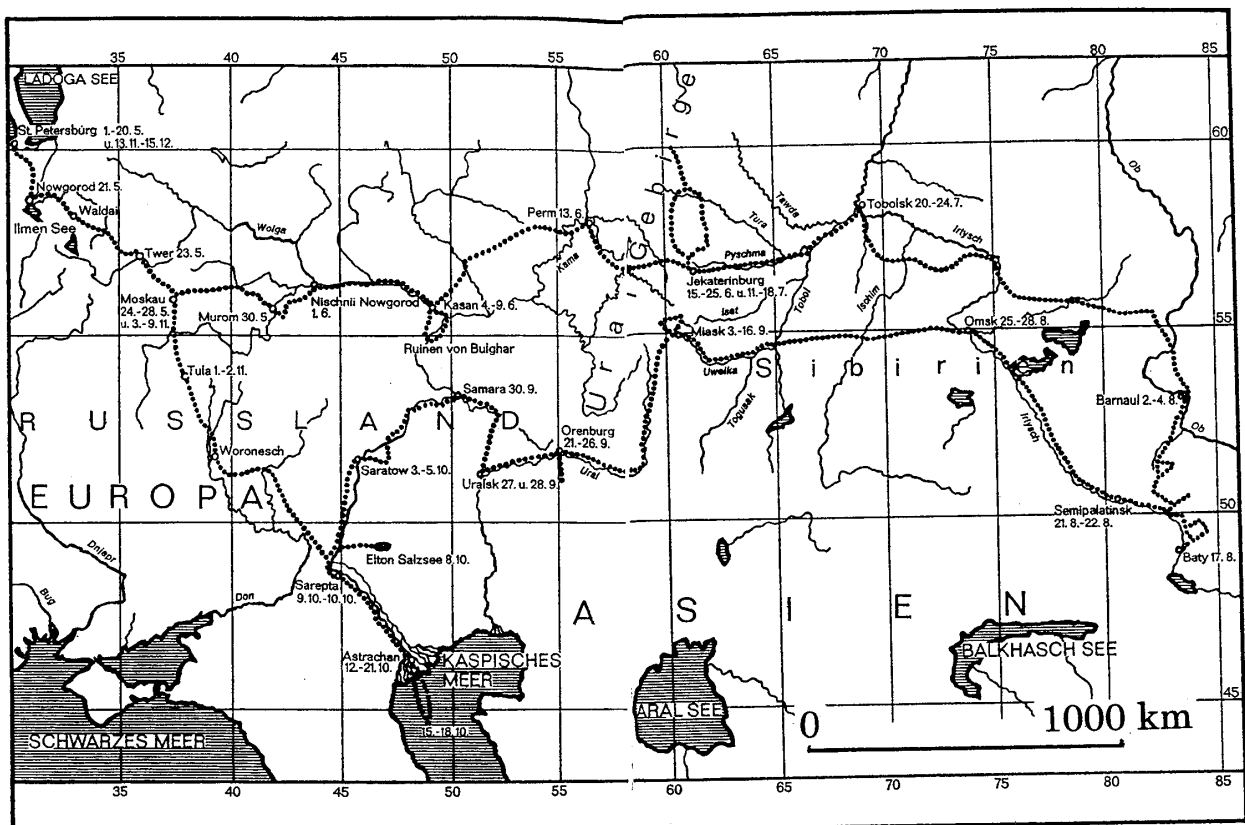
1830-48年 61-79才 ほとんど毎年数ヶ月をパリで過ごす。

1831年 62才 ゲーテをヴァイマールに最後の訪問、ゲーテ翌年3月22日82才で没、外交使節としてパリへ。

1834年 65才 南米旅行完成。「コスモス」原稿執筆始まる。

1835年 66才 兄ヴィルヘルム4月8日Schloß Tegelで死去（67才9ヶ月）。3回目の外交使節としてパリへ。

1840年 70才 プロイセン王フリードリッヒ3世死去、フリードリッヒ4世プロイセン王に。王は



地図2 フンボルト 1829年のロシア・中央アジア旅行のルート (Pfeiffer 1969)

フンボルトを離さず、ポツダムのシャルロッテンホーフ城内のオリエント風の美しい館をあてがい、なるべくポツダムにるように命令、Pour le mérite勲章平和部門に叙勲され、終身宰相に任命さる。王に憲法起草や内政の民主化などいろいろ提言。

1854—47年 76—78才「コスモス」1巻・2巻完成。

1850年 81才「コスモス」3巻完成。

1858年 89才「コスモス」4巻完成 5巻は彼の死後1862年に。

1859年5月6日 ベルリンOranienburger Straße 67で89才7ヶ月の生涯を閉ず、5月10日ベルリンドームで葬儀、5月11日Schloßpark Tegelのフンボルト家の墓所に埋葬。

多彩な人との出会い

子供のころ、フンボルトの家はベルリン都心と、20kmほど西のTegelの城館に二つあり、ベルリンにいる間アレクサンダーはよくベルリン植物園へ通い、植物・昆虫・鉱物の収集に熱中し、それらを好んでデッサンしたり絵に描いた。早熟な才能を示すそれらの絵を母が壁に掛けていた。スウェーデンの植物学用語の確立者であるCarl von Linné (1762年まではLinnaeus) の植物学をベルリン植物園長Willdenowに教わるようになった。

父が選んだCampe・Koblanck・Kunthの3人の家庭教師によって教育されたが、3人目のGottlob Kunthの影響が最も大きい。Campeは絵地図遊びをやらせ、パリ・ペテルスブルク・ロー

マ・島嶼・雪山・熱帯の植物などの絵を示し、後の彼の著作「Ansichten der Natur」を書く潜在的動機となっている。Campeは青少年向けの本を数冊著して有名人になっており、作品のうちに人気の高かったものが「若きロビンソン」と「アメリカの発見」で、後者は何人かの航海家の物語を一冊にまとめたもので、フィクションよりも面白くなっていた。これらがフンボルト兄弟が読んだ最初の本であり、アレクサンダーが受けた影響は大きく、やがてクックの「航海記」、ラ＝コンダミーヌの「南アメリカ内陸旅行略記」へと進んでいった。

Kunthは1783年以降、兄弟をSchloß Tegelから当時人口わずか14万で大学のまだないベルリンに連れてゆき、コロキウムを聴かせた。多くの講師の中で最も有名で影響力のあったのが、後年外務省の高官となったvon Dohm（経済学）で、その他に自然法のKlein、古典語のFischer教授、「Gazette littéraire de Berlin」編集長Le Bauld de Nans教授、哲学のEngel教授などがいた。Dohmの経済学からは社会学的興味を与えられ、後年南米の民族間の差別やアメリカで奴隷制などへの社会階層への関心を醸成されるきっかけとなった。

Kunthはフンボルト兄弟をベルリンの哲学者Moses Mendelssohn（音楽家メンデルスゾーンの祖父）の文学的啓蒙思想のサロンや、ユダヤ人のサロンへ連れて行って、後の人脈形成と社交界での生き方を教育していった。サロンの中で、兄弟が熱心に通ったのが22才のHenriette Herz夫人のサロンであり、Dohmが紹介したものらしい。彼女は17才年上のユダヤ人医師の夫人で、父はポルトガル人で、いわゆるセエファルディ（イベリア半島に住むユダヤ人）の子孫であり、社交界の花形で、「GendarmenmarktとHenriette夫人を見ないものは、ベルリンを見たことにはならない」とか、「オペラ座とHenriette Herzを見ざるものは、ベルリンで何を見たのやら」と言われるほどの才女で、アレクサンダーは「誰よりも美しく極めて聡明な人」・「女性の中で一番教養のある人」と書いている。アレクサンダーにヘブライ語を教え、両者はヘブライ語でコミュニケーション出来るまでになっていた。当時公的には排除されていたユダヤ人社会をみて、その経済力と新大陸などとの人脈の広さに、初めてコスモポリタニズムというものを、アレクサンダーは発見した。兄Wilhelmはこのベルリンのサロンで妻カロリーネと相知ることになり、1791年エアフルトで結婚、夫24才、妻25才。

Kunthは真の進歩的人道主義者であり、フンボルト兄弟を古いプロイセンの偏狭さではなく、自由な市民的自由さで社交性に富んだ人間へと教育した。彼自身後にシュタインの協力者として自由主義産業政策を行ったが、拠り所は最先端の啓蒙主義的教養であった。

フライベルク鉱山アカデミー学長Abraham Gottlob Wernerは、火成論に対して水成論学派を確立していたが、フンボルトに対しては父親のごとく暖かく歓迎してくれ、午前中は鉱坑で、午後には講義、晩は自分の研究、とくに地下性の下等植物の細菌研究に没頭した。ベルリン時代の友人で、地理学・古生物学者のLeopold von Buch とザクセン王国鉱山・冶金局長官Johann Karl Freieslebenの両人が協力してくれた。しかし、母の死によって入ることになった遺産によって大きな旅行が可能となり、1792年2月26日、23才でフンボルトはフライベルクを去り、彼の修行時代は終わることになった。

フンボルトの生涯とキャリアを展望すると、これまで年譜で触れてきた人物以外に、よくもまあこれだけ沢山の有名人・研究者（数学の王と言われたドイツのKarl Friedrich Gauß・シャルルの法則の発見者フランスの物理学者Gay-Lussac・フランスの天文学者Dominique François Jean Arago・南米フローラのエキスパートでスペインの植物学者Don José Celestino Mutis）・フランスの作家François de Chateaubriand・作曲家Franz Liszt・建築家Léonard Fontaine・画家Claude Joseph VernetとJean Auguste Dominique Ingres・写真機発明者Louis Daguerre・政治家などとの関係をもてたものだと、驚嘆せざるを得ない。さらに、Auguste Comte・Alexander Pushkin・Napoleon・Simón Bolívar・Jefferson・・・など枚挙にいとまがない。これらの人物との相互関係から知識と知恵を吸収し、成長し、「科学の帝王」大アレクサンダー＝フォン＝フンボルトに成長していった。

フンボルトは亡くなる26日前、オランダの医師として長崎に来たことのあるシーボルトが、63才で30年ぶりに再度日本へ旅立つ際に、送別の辞（フランス語で）を送っている。「我が優れた友よ、旅行家にして先輩なる余は科学に対する情熱より発したる君が、今回の高遠なる志望を聞いて、これをいかに尊敬するかを公表せんと欲す。・・・日本およびその群島に関する大著述は、博物学のあらゆる方面にも亘れり。われらの植物園は貴兄のもたらしたる植物でもって飾られつつある。君は今その偉大なる研究を継続し、完成するために、再び同所に向かわんとす。君よ健在なれ。新たな勤労によく堪えて、この高尚なる事業を完成せられよ。君の健康は自然科学の進歩に対して興味を有するすべての人々のために、きわめて重要なものなればなり。以上は余が君の先輩として、また熱心に敬愛する称賛者の一人として、君に贈らんとする辞なり。1859年4月10日。ベルリンにて、アレクサンダー＝フォン＝フンボルト」（呉 秀三：シーボルト先生 2、平凡社、99頁）（オリジナルは呉 秀三：シーボルト先生：其生涯及功業、吐鳳堂書店、1896年刊、492頁）。オランダのライデンで書きあげたシーボルトの「日本」は、Carl Ritterによってフンボルトに紹介され、フンボルトには日本に関する情報も入っていたし、アレクサンダーは兄Wilhelmに1738年メキシコで出版されたスペイン語の「日本文典」を贈呈し、言語学者である兄が日本語の人称代名詞について論じている。63才のシーボルトが30年ぶりに日本へ道連れにしたのは、13才の長男で、その名はアレクサンダーであった。アレクサンダーはその後、駐日イギリス公使館館員となり、明治政府の外務省に雇用されている（木村陽二郎：シーボルトと日本の植物、1981年刊、恒和出版、235頁）。

ベルリンよりパリを好んだ

南米旅行へ旅立つ前に用意した多くの観測機器：温度計・湿度計・バロメーター・経緯儀・クリノメーター・六分儀・象限儀・地震計などの天文地学気象観測機器や、解剖用具・植物採集用具などはすべて観測機器製作の中心地パリで購入し、それぞれの観測専門家との交流で情報を集め、自分独自の技術にしあげていった。一分野の科学ではなく、広い自然科学全般に亘る観測と観察をするためには、多くの専門家の集まっているパリでなければできないことであった。天文・気象・火

山・海流・地震・鉱物・岩石・植物・動物・民族・社会階層・政治・経済に亘る事象に関心を抱き、観察眼とそれを裏付ける知識を習得するには、パリは当時としては最も理想的な都市であった。

Georg Forsterと21才で初めてパリを見て以来、フンボルトはパリで過ごすことが多かった。子供の頃の家庭教師Kunthがプロイセン王の意を汲んでベルリンへ帰るように圧力をかけたとき、彼は「ベルリンは田舎だ」と書いている。兄Wilhelmも折に触れてベルリンに戻るように説得しているのは、身内から「裏切り者」を出したくないという気持ちだけでなく、弟のような才人が祖国で活躍しないことを残念で、勿体ないと感じていた。Wilhelmは1789年哲学者Fritz Jacobiに自分と弟の違いを手紙の中で次のように述べている：「同じ教育を受けながら、私たちは子供時代から、気質においても、性格に置いても、好みにおいても、さらに科学的な物事に向かう方向においてさえも、いつも違っていたのです。弟の頭脳は私に比べて機敏で豊かであり、想像力は活発で、美的感覚は鋭く、芸術感覚一般は、——それというのも、おそらく彼は自ら熱心なデッサンやら銅版画などの二三の美術に身を入れたからでしょうが——とき澄まされ、洗練されていました。全体として彼はいたるところであらゆる理解において、私よりも、新しいイデーを把握し、物事の本質から引き出す感覚と力をもっていました。私のほうと言えば、イデーを展開させ、比較し、加工する能力を、弟よりももっていた」。グリム兄弟に比せられるフンボルト兄弟は、賢兄賢弟の組み合わせで、2年3ヶ月の差であった。アレクサンダー27才の時、母がなくなって遺産相続を取り仕切ったのは家庭教師であったKunthで、兄はTegelの館と土地、およびJäger Straße 22の家を相続し、弟は現金と有価証券を相続して、南米旅行や、後のベルリンとパリの二重生活の費用に充てていた。アレクサンダーはその他、プロイセン王から2500－5000ターラーの年俸を得ており、印刷費が膨大で引き受け出版社がなかったため、自費で自分の著作の出版費用を工面する以外に、生活に困ることはなかった。ちなみに、枢密顧問官で、国务大臣であったゲーテの年収は3100ターラーで、これはヴァイマル（当時の人口6000）一の高給であった。

しかし、アレクサンダーは「パリからベルリンへ移るというのは、この世を去るに等しい」とか、「私は孤立して生き、外国のようになった自分の国の中で、追放者の如く暮らしている」と書いている。ゲーテの言葉を借りると、「パリのような都市を考えてみたまえ。大国の最高の頭脳がたった一カ所に寄り集まって、日々の付き合いや、議論や、競争の中でおたがいに切磋琢磨している。そこでは全世界の各国から来た自然の物産や芸術作品の最高の物が、日々の展覧に供せられている。こういう世界都市を考えてみたまえ」。ドイツでは、ある者はベルリンに、ある者はヴァイマルにと分散し、個人的な接触や交流も滅多にない状態であった。

フンボルトは著作を著すのにほとんどの場合フランス語を用いており、ひそかにプロイセンからの精神的離反を強めていた。母方の血がフランスであるという出自以上に、プロイセン王ヴィルヘルムのメッテルニッヒの言うなりになっている旧体制にどっぷり漬かっているプロイセンの政治・社会体質に反発しており、「ドイツは退屈で、パリでしか気が晴れない」、フランスが「自由の地」であり続けた。

1824年から26年の間、アレクサンダーはほとんどパリを離れなかった。街路にガス灯がとまり、大規模な産業博覧会が準備され、キュビエBaron von Georgers Cuvier（フランスの動物学者、パリ自然史博物館の比較解剖学教授、動物界を4群に分類し、古生物学を確立）の報告が大衆の関心と呼ぶなど、世界中で一番モダニズムの横溢していた都市であった。国王は国際会議には必ず国際的有名人フンボルトを同行させて自分の権威付けに利用し、お忍びでパリに現れ、フンボルトにパリ見物の案内をさせたりし、両者は互いに利用しあっていた。1826年ヴィルヘルム三世はベルリンに戻ることを強く命じたが、彼はパリに留まったのに対し、「本当のプロイセン人なら誰しも、嫌悪するはずの国に、これ以上そちが滞在することは許可できない」とアレクサンダーに書き送っている。その手紙の中で、アレクサンダーの俸給を5000ターレルに引き上げ、年間4ヶ月の休暇を与えることも告げている。国王はフンボルトに話し相手を務めてほしかったのである。国王はアレクサンダーが無神論者であり、民主主義者であり、大きな才能の持ち主であることは、重々承知していた。

栄光に満ちた生涯

ドイツでよりも世界中の国で高名を博し、科学者に与えられる最高の榮譽であるイギリスのRoyal Societyの金メダル：コプレー勲章を授与され、150もの学会の名誉会員であり、フランスのレジョンドゥヌール最高勲章、プロイセンの黒鷲勲章、他にも20もの外国の勲章を受けていた。南米ペルー沖を南から北へ流れる寒流は彼に因んでフンボルト海流と呼ばれ、オリノコ流域にはフンボルト＝コースが出来ている。アメリカ合衆国にはフンボルト市が誕生し、フンボルト山もある。シャム王の執務室には、ヴィクトリア女王・ナポレオン三世・アメリカ大統領ジェームズ＝ブキャナンの肖像と並んでアレクサンダーの肖像も見られたという。毎年、知らない人から数千通の手紙が届き、訪問者は引きも切らなかった。

当時文化的後進国アメリカ要人の「ポツダムのフンボルト詣で」は続き、後のハーバード大学創立者・アメリカ学士院会長・アメリカ地理統計学会会長・芸術家・作家・パナマ鉄道創設者・ジャーナリスト・大公使・前大統領フィルモア・銀行家・・・枚挙にいとまがない。アメリカのVIPがヨーロッパに来る際に、フンボルトに会見して帰ることこそ、最大の名誉であり、目的でもあった。栄光とはこんな事を言うのであろうし、この偉大さに比肩できる人物を今日の世界で見いだすのは困難である。

Ⅲ フンボルトの業績の概略

89才7ヶ月まで多彩にして華麗な生涯を全うしたフンボルトの業績を展望するのは至難の業ではあるが、次のように区分するのが目下は妥当と考えている。

1. 短期の旅行や実験・調査の研究成果
2. 新大陸旅行
3. 中央アジア探検

4. 集大成「コスモス」

5. ベルリン・パリ社交界における講演・談話

1. 短期の旅行や実験・調査の研究成果

短期の旅行や実験・調査などの研究成果のいくつかは、フンボルトの年譜に記載したが、非常に多数ある。いくつかを列記すると次のようなものがある。土地の起伏図・地質図の作成、ゲイリュサックと共同で大気の組成の研究、ヨーロッパの農作物表、人類初の等温線および地球上における気温分布、諸地方における火山の構造と活動形式、最も重要な山地の脊梁と山頂高度。

2. 新大陸旅行

ラコルーニャを出発してからボルドーに戻るまでの5年2ヶ月にわたる南米旅行こそは、フンボルトの業績の最も大きなものであった（地図1）。5年間の南米旅行からは、40の大冊と47の論文の他、各国語への翻訳の重複もあるが、その業績は148にもものぼる。

新大陸旅行は、オリノコ川流域探検（写真1）、チンボラッソウ登山（写真2）と南米太平洋岸地域、アメリカ合衆国の3部に分かれるが、やはり最大の業績はオリノコ川流域の探検の成果であろう。天文学者・地理学者・地質学者・植物学者・動物学者・人類学者としての総合科学の真の意味での博物学者としてのフンボルトの観察と記述は余人をもって代え難い。民族への聞き取りや、クマナで対応してくれた神父や総督などとの懇談から、人間集団に1. スペイン人、2. クリオール、3. メスティーゾ（白人とインディオの混血）、4. ムラート（白人と黒人の混血）、5. インディオ、6. ザンボス（黒人とインディオの混血）、7. 黒人奴隷、の社会階層を見て取り、不快感を露わにしている。メキシコでも同じことを認識し、「メキシコは不平等の国である」と述べている。

1808年、39才時に書いた「自然の諸相（Ansichten der Natur）」は、フンボルト自身愛好の書と呼ぶほど、詩的であり、穏やかではあるが心を刺激し、偉大な自然という演劇の舞台であり、「純粋にドイツ的感情で著された本」と呼んだ。この本の序言は次のような文章で終わっている。「いろいろなところで私は、自然が人間の道徳性と運命に絶えず影響を及ぼしているのを指摘したつもりです。これらの頁はとくに悩める人々のためのものです。荒れ狂う人生の波から救われたい人は、私に付いてうっそうたる原始林の中へ入り、見渡す限りのステップを横切り、アンデス山脈の高い屋根に登って下さい。そういう人のために世界に向かう合唱が歌われているのです。

山の上こそ自由だ！ 墓穴から上る息も、

そこの澄んだ空気までは達しない。

人間も悩みを捨ててやってくる、

そこでこそ世界は完全に広がっている。」

この本はゲーテ的感觉で書かれた本で、今日に至るまで称賛を受け、また読まれ続けている。雑誌・書簡・回想などの文献の反響などを集めれば、ゆうに一冊の本になってしまう。1826年に第2版、1849年に第3版、以後時折版が更新され、フランス語・英語・オランダ語・ロシア語にも翻訳

されており、フンボルトの本の中では最も庶民的な本となっている。

南米旅行の当時の世界への影響と反響は非常に大きかったようで、あるボリビア人は「スペインの征服者が南米でしたことよりもはるかに多くのことを、フンボルトはアメリカのためにした。」と言っている。ダーウィンは学生時代に「南米旅行」を読んでおおいに感銘を受け、在学中にテネリーフェ島への旅行を計画し、それがやがてビーグル号での海洋探検に発展していった。ヨーロッパ文明人が動物視してきた奴隷・黒人・フェゴ人と、ヨーロッパの文明人との間に、人間として本質的な差がないとの認識によって、進化論を着想したと思われる。人間と他の動物との絶対的差異もまた消すことができるかもしれないからであった。両者共に奴隷制に対しては反感を抱き、ダーウィンはビーグル号航海記の中でフンボルトの奴隷制反対の思想に言及しており、「人間の由来」の中には、「南米旅行」から多くの引用がなされている。

3. 中央アジア探検

8ヶ月16日におよぶ60才になってから馬車に乗って18,000kmに及ぶ「中央アジア探検」は、ロシア皇帝がウラル山脈に白金や金鉱・ダイヤモンドなどが発見される可能性があると言ったフンボルトに調査を依頼したものであった（地図2）。ドイツ人鉱物学者で、後に結晶学で歴史的な名を残すことになったグスタフ＝ローゼGustav Roseと、ロシア政府から指名された博物学者C. G. エレンベルクChristian Ehrenbergが同行した。フンボルトは貧しい農民の民族調査にも関心があったが、ロシア政府は民族調査はしないとの約束を取り付けた。ペテルスブルク・モスクワ・ニジニノヴゴロド・カザン・ペルミ・ウラル・トボリスク・コリバン湖・アルタイ・セミパラチンスク・南ウラル・アーストラハン・モスクワ・ペテルスブルクのコースであった。探検後ロシアで多数の栄誉と贈り物を受け、「現代のアリストテレス」と呼ばれたが、学術的成果にはかれは満足していなかった。

この旅行の旅行記は随員の若いグスタフ＝ローゼが、「ウラル・アルタイ及びカスピ海への旅」（1839-42 ベルリン）にまとめた。フンボルト自身は3巻の「中央アジア」（フランス語 1843パリ、ドイツ語版は2巻で1843-44 ベルリン）を執筆した。中央アジア探検旅行はフンボルトにとって、新世界で獲得した偉大な総合的観察眼を補強し、確認するものであった。これ以後新たな調査・探検活動はやらずに、自然界全般を展望した大作の執筆に没頭する。

4. 集大成「コスモス」

集大成「コスモス」はフンボルトが晩年に全勢力をかけて執筆したものであり、フンボルトはファルンハーゲン＝フォン＝エンゼCarl August Varnhagen von Ense（外交官・著述家）に宛てた手紙の中で、「私が抱いた途方もない考えというのは、一冊の書物の中に、星雲から岩に生えている苔まで、今日われわれが自然界全体について知っていることのすべてを収めようということです。この作品は読者の精神を快く刺激するように生き生きと書かれ、人類の知的発展に一時代を画するものとなるでしょう。この著作の執筆をフランス語で始めてからもう15年になりますが、やっと

『コスモス』という標題をつけることにしました」と書いている。しかし、地理学者ペッシェル Peschelの言を借りれば「余りにも文学的な作品」であるという。「コスモス」1巻に「自然は思慮深い観察に従えば、多様の統一、雑多なものが形態と化合とを通じて結びあうこと、自然物・自然力の結晶であり、生きた全体である。」と書いてある。彼は「あらゆるものが全体へと織りなす様」を究明することを試み、生物体の統一の把握を試みたのであって、個々すなわち形態の学問であった。フンボルトは総合家であり、美学者でもあった。

ライプチヒ大学初代地理学教授ペッシェルOscar Ferdinand Peschelは、フンボルトの地理学に対する貢献を次の9つに纏めている。1. 大陸各地の正確な経度の測定、2. スペインの地形断面図の作製、3. 大陸の平均高度の算定、4. 山地比較研究の手段として峠・山頂高度の算定、5. 地磁気研究、6. 火山成因の研究と火山帯の発見、7. 等温線の創案、8. 植物諸相に基づく気候区分、9. アジアの地形、とりわけ山脈の配置に関する研究。ペッシェルはフンボルトがこれら9項目にもわたる立派な研究業績を上げており、単に「コスモス」の著者と見られていることに不満であり、「コスモス」は本来の地理学作品とは違ったものであると、主張している。

5. ベルリン・パリ社交界における講演・談話

「南米旅行」・「中央アジア」・「コスモス」などの形になっているもの以上に、フンボルトの偉大さ・幅の広さ・国際性・自由人の主張などが、談話や講演に星雲のとくに散りばめられている。アメリカの黒人奴隷制に対する嫌悪感、シモン＝ボリバルなどの南米独立への支援、若手研究者への財政的・精神的支援、フランスと祖国プロイセンの政治的仲介の労、プロイセンの民主的政治体制樹立への国王への陰ながらの助言尽力、パナマ運河掘削のジェファーソン大統領への提言、などなど、枚挙にいとまがない。各界の要人と彼の談話について、筆者らはかつてHanno Beckの研究を翻訳紹介した（佐々木・田村1986）。フンボルトに関する研究は、すでに彼の存命中からかなり多数あったが、没後彼が書簡の公表を遺言で禁じたために中断したが、やがて堰を切った洪水のごとく、無数とっていいほどのフンボルト研究が、ドイツ・フランス・イギリス・アメリカ・ラテンアメリカ諸国で発表されている。

旧東ドイツ時代にベルリンの科学アカデミーに、1958年に研究室が創立され、1970年に「Alexander von Humboldt Forschungsstelle」と名称を変えたが、フンボルトの日記や手紙、さらには外国語で書かれたり、外国人との手紙を再現して、ドイツ語で出版しようとする研究所である。「南米旅行」の28-30巻である「Relation historique」と呼ばれているフンボルトの著書Relation historique du Voyage aux Régions équinoxiales du Nouveau Continentは、Hanno Beckによって註を増やして1970年にフランス語のままで出版され、1997年にHanno Beckによってドイツ語に翻訳された（Hanno Beck 1997）。

1828年パリから戻ったフンボルトは、11月3日から翌年4月26日にかけて大学講堂での61回に亘る講演と平行して、音楽アカデミー講堂でも16回の講演をベルリン市民に対しておこなった。聴衆はプロイセン王・貴族のみならず、大学教授・学者・教師・学生・芸術家・官吏・軍人・職人・家

庭婦人など、多様な階層の人々が競って参加し、半数は女性であったという。彼の活気に満ちた話しぶり、驚くべき即興の才、驚異的な記憶力などが多くの聴衆を魅了した。「アレクサンダーの持つ影響力は疑うべくもない」と、兄ヴィルヘルムはゲーテに驚嘆して書き送っている

フンボルトの講演についてゲーテは1799年に次のように書いている。「鉱山監督官が当地に来ている。彼が1時間で講演する内容を、本からでは1週間かけても引き出すことは出来ないであろう。」、さらに「私はフンボルトをたぐいまれな人物と呼びたい。なぜなら、このように確実な、整頓された活動と、精神的な多様さを結合させている人物を、知らない。彼のこれからの科学に対する可能性は、予測することが出来ない。」ゲーテは晩年エッカーマンに口述させているが、フンボルトに対して最終的に次のように述べている。「何という人間であろうか。彼とは非常に長い間知己であったが、新たに驚嘆を感じている。学識においても現実的な知識にあっても、彼と比類する人物はいない。そのうえ、私がまだ出会ったことのないほどの多面さはどうだろう。どこを触れても、彼がどこにいても、精神的宝物をわれわれに注ぎかけてくれる。彼はたくさんの管のある噴水に例えられ、どこにでもただ器を置けば水が受けられ、絶えず元気付けられ、尽きることのない水をわれわれに向かって流してくれる・・・」。

フンボルトよりも10才若く、ベルリン大学初代地理学教授となったCarl Ritterは、フンボルトの影響を受けて地理学研究に興味を抱くようになったが、フンボルトが旅行から帰ってくると「古い世界に恵み深く光を投げかけるために、西方から光と熱に満ちた新しい太陽が昇ったかのようにだった」と、熱狂的に大声をあげた。16日間も每晚連続、音楽学校大ホールで行われた無料公開講演会は、「王から店員にいたるまで」ベルリン子たちを魔力に引き込んだ。講演というと通常は哲学的なことや、文芸的な話しか聴かされなかった1200の聴衆を前にして、フンボルトは宇宙像を展開したのであった。常に全世界へと目を向けさせながら、芸術的な言葉で、色彩豊かな華やかな個々の形態を呈示した。難しい問題でも、教養ある人に理解してもらう術をフンボルトは知っていた。彼の話の中の個々の形態は、調和のとれた一幅の絵へと結晶していった。その絵は人間の歴史と関係をもって表れた。このフンボルトの音楽学校大ホールでの講演は、ドイツの教育史において画期的なことで、上流階級だけでなく、あらゆる階層の人を啓発し、知識の民主化を図った点で、フンボルトの意図するところであった。

フンボルトの音楽嫌いは有名で、アレクサンダーは音楽がなるとわざと大きな声で、音楽を遮るようにしゃべりまくったといわれている。

IV フンボルトとアメリカ合衆国

1804年3月7日、34才のフンボルトはメキシコ東岸のヴェラクルスからハバナへ向かい、数日滞在の後アメリカ行きの船に乗り、5月19日フィラデルフィアに入港した。7月9日フィラデルフィアからボルドーへ出航するまでの50日間のアメリカ滞在であった。Thomas Jefferson大統領は、かつてパリ駐在全権公使であり、ライン川地方を旅行したことがあるためドイツを「第二の祖国」と感じており、フンボルトを暖かく歓迎した。首都はワシントンに移っていたものの、独立宣言の

発せられたフィラデルフィアは若い共和国の聖地として、知的活動の中心であった。ベンジャミン＝フランクリンがロンドンのRoyal Societyにならって作ったアメリカ哲学協会があり、会員の多くはドイツの科学出版物の熱心な読者であり、アメリカの新聞でもフンボルトのチンボラッソ登山を、さらにフンボルトの人となりを書いていた。滞在中の案内役は、画家で会員のチャールズ＝ウィルソン＝ピールCarles Willson Pealeで、科学者でもあった。彼はジェファソン大統領に次のように書いている：「フンボルト男爵は私が会った人の中では最も偉大な旅行家であります。ドイツ訛りはあるものの、みごとな英語を話しました」。彼はフンボルトの極めて生き生きとした肖像画を3日間で書きあげている。さらに、「彼の能弁は人を哑然とさせるものがあり、英語・フランス語・スペイン語を交えつつ、よどみなく彼がしゃべるのを聞くのはたいへん愉快であった。彼の博識は植物学・鉱物学・天文学・哲学・宇宙論に及び、とどまる所を知らない。彼は自由主義教育を受け、多くの国の学者と交わってその教養を磨いた。11才の時以来絶えることなく旅行をしており、同じ所に6ヶ月以上留まったことはないと言明している」、「彼はわれわれ3人合わせたよりも多くしゃべり、われわれの各々よりも2倍速く話した」。

国務長官マディソンJames Madison・財務長官ガラティンAlbert Gallatin・画家ギルバート＝スチュアート・博物学者ウィリアム＝ソーントンなど大統領の友達と熱心に交際した。毎晩招待されるサロンでは彼の才気が遺憾なく発揮されていた。マディソン夫人は妹への手紙で、次のように書いている。「ご婦人方の全てが彼に心をときめかせています。個人として人を魅了するにはどこか不足はあるのですけど。私たちの客となった旅行者のうちで、彼ほど洗練された、興味深い人はいませんでした」。

大統領はアメリカがフランスから買ったルイジアナ地方のメキシコとの国境線画定をフンボルトに依頼した。彼は数日間何枚もの地図で作業をして、3週間の歓待に返礼した。パナマ運河開削を大統領に提案したことは、すでに述べたが、ヨーロッパへ帰ってからパナマ地方の地図を広げて、5種類もの人工水路（運河）計画を立案提案している。アメリカの奴隷の身分規定をフンボルトはすでに読んでおり、スペインよりも厳しいことは分かっていたが、アメリカ滞在中はそのことを口に出すことはせず、客人としての節度はわきまえていた。しかし数年後アメリカ人は、生まれや皮膚の色がどうあれ、人間の人格は尊重されねばならない、とのフンボルトの著作を読まされることになった。

フンボルトがヨーロッパへの航海中の1804年7月20日、American Philosophical Societyは彼をメンバーに選出したが、これは当時としては最高の荣誉であり、同じ時にHavard College 学長Joseph Willardもメンバーに選ばれている。

フンボルトの没後10年経った1869年9月14日、彼の生誕100年祭がアメリカ中各地で盛大に執り行われた。The New York Timesは翌9月15日付け一面トップとその他のページで、100年祭の様子を伝えた。「どんな国民でも達成出来ないような名声のある、偉大な科学者」の生誕祝賀行事は、ニューヨークのセントラルパークでのフンボルトの胸像の除幕式に始まり、午前中は長い行列行進、ついで松明行列行進、夕方は新しいLiederkrantz Hallでの1万5000人もの大バンケットが行われた。

この時除幕されたフンボルトの胸像は、5番街に面するセントラルパーク南東角、59番ストリート、プラザホテルの向かいにあったが、1982年10月、セントラルパーク西側にあるアメリカ自然史博物館の向かいのNaturalists' Cornerに移された。

フンボルト生誕100年祭はニューヨークのみならず、ボストン・ワシントン・ボルチモア・サンフランシスコ・シラキュース（1万5000人が参加）・バッファロー（前大統領フィルモアが実行委員長を務めた）・シカゴ・メンフィス・オールバニなど全米各地で行われた。The New York Times は9月16日の見出し：*Momuments to Science and Genius—the Humboldt Celebration* で、偉大なドイツのナチュリストへのアメリカ人の意見を概括している。これはフンボルトが若い国アメリカを絶えず賞賛し、アメリカ市民に愛と友好の感情を抱いていたことを、アメリカ人が敏感に感じていたためであろう。

フンボルトがヨーロッパへ帰って30年以上もたった1837年、Bennjamin Franklin の孫の一人 Alexander Dalles Bache 教授（National Academy of Science院長）は、いかにフンボルトが合衆国を訪問した時の思い出を大切にしているかを、次のように書いている。「彼はフィラデルフィアを訪れたときのことを話す時はいつも上機嫌で、その町の人口・面的拡大・科学・文学が一步一步発展する様を目に描いていた。彼はそこで会った人たちのことや、フィラデルフィアが属す国の偉大さを話すのが好きであった。彼の科学上の業績は主にこの大陸に関するものであり、彼はこの大陸に自分の価値・褒美を見ていた。われわれには、彼がほとんどアメリカ人であるように感じられる・・・」

フンボルトはアメリカからヨーロッパへ帰ってからもアメリカ政府刊行物を送付してもらっており、ヨーロッパ人の中ではアメリカの政治・経済を最も良く把握していた人物であった。事実彼は2巻の *Essai Politique sur le Royaume de la Nouvelle Espagne* (1811年パリで出版直後にロンドンで英訳) を著わしている。1807—27年のほとんどを南米旅行を執筆するためにパリで過ごしたが、その間はもちろんのこと、ベルリンにあってアメリカとの科学的・政治的交流は大西洋を跨いで続いた。1837年までにアメリカからフンボルト詣でした人は70人にものぼっていた。

パリで会ったアメリカ人

1807—27年の20年間、フンボルトはほとんどを南米旅行で集めた資料整理と「南米旅行 *Voyage aux Régions Equinoxiales du Nouveau Continent*」30巻執筆のためにパリで過ごした。パリ滞在中にフンボルトを訪問してきたアメリカ要人の主な人物をリストアップすると、次のような人物が見られる。ハーバード大学スペイン文学教授でボストン図書館共同創立者のGeorge Ticknor, Boston Society of Natural History副総裁で電気磁石電信の発明者Samuel Finley Breen Morse, 地質学者・化学者Thomas Jackson、作家Washington Irving。Jacksonによると、フンボルトはアメリカで金とプラチナの産出を予言しており、事実金はノースカロライナ・カリフォルニアで1850年頃、プラチナはカリフォルニアで、ダイヤモンドはジョージアで発見された。

フンボルトはパリで書いた著作をアメリカの友人に贈呈寄贈し続けたことは、アメリカ国会図書

館ジェファーソン＝コレクションに1816年刊の「植物の地理的分布」が納められていることからわかる。逆に、友人ゲーテの依頼でジェファーソンの手紙の一つをゲーテ自伝コレクションに提供している。1814年春、第2アメリカ独立戦争和平に來たアメリカ全権公使William H. Crawfordや旧い友人Gallatinが孤立しないように、フンボルトの友人でフランス政治家Lafayetteに頼んでアメリカのために努力した。アメリカ首席全権大使で、後に合衆国大統領となったJohn Quincy Adamsとも知己となり、一緒に「Institut de France」の会合に出席し、後年1822年彼がAmerican Academy of Arts and Science in Boston総裁に就任したとき、フンボルトをアカデミーのフェローに任命した。前財務長官Gallatinはアメリカ全権公使として7年間パリにいたとき、フンボルトから民族学・民族誌の問題に興味を焚きつけられ、1843年American Ethnological Society in New Yorkを設立して「アメリカ民族学の父」と呼ばれるほどになり、フンボルトは名誉会員になっている。

ゲッティンゲン大学とベルリン大学で勉強してからパリを訪れた歴史家で外交官（1867—71年最後の駐プロイセン、アメリカ全権公使、1871—74年初代の駐ドイツ帝国、アメリカ全権公使）のGeorge Bancroftはハーバード大学学長 John Thornton Kirklandへの1821年5月28日の手紙の中で、フンボルトについて次のように書いている。「私はフンボルトを見ればみるほど、彼を称賛せざるを得ません。かれはどんな話題でも気楽に話します。哲学の問題や、無味乾燥でおもしろくないように見える話題でも、彼の手にかかるとおもしろく、教訓に満ちたものになります。政治問題においても彼はリベラルであることははっきりしており、政治的知識を豊富にもって議論していることが分かります。」26年後の1847年、Bancroftは駐英アメリカ全権公使、フンボルトは外交使節として、両者はパリで再会した。Bancroftは次のように書いている。「私はフンボルトの中に、the same friend of man, the same friend of my own native country, the same love of liberty, the same breadth of statesmanship・・・を見いだします。」

ベルリンで会ったアメリカ人

ヴィルヘルム3世の強い要望により、フンボルトはパリから850kmも東北東のベルリンに住むことになり、アメリカとの交流はもっぱら文書によることになった。しかし、汽船の発達により、大西洋横断汽船の便は月1回となり、ニューヨークからブレーメンへ郵便船「ワシントン丸」で来て、そこから300km東のベルリンへのアメリカ人訪問者が増えてきた。だだでさえ訪問客が多くて、訪問客制限をしていたフンボルトはますます厳しい訪問制限をし始めたが、アメリカ人に対しては門戸を開いていた。それらの中に次のような来訪者がいた。1847年にベルリンに來た探検家・考古学者John Lloyd Stephens、作家で後の駐ベルリン全権公使Bayard Taylor、歴史家William Hickling Prescott, 「The American Journal of Science and Art」編集者で化学者・地質学者Benjamin Silliman教授とその息子、金属学・鉱物学教授George Jarvis Brush、ニューヨークの判事で後にアメリカ地理学・統計学会会長となったCharles Patrick Daly、統計学者で第7回・第8回アメリカ国勢調査委員長Joseph Camp Griffith Kennedyと、教育者でニューヨークの

Astor Libraryの共同創立者のDr. Joseph Green Cogswell。

訪問者の洪水は1859年のフンボルトが亡くなるまで続いた。歴史家・外交官George Folson、コロンビア大学教授Francis Lieber、画家Moses Wight、考古学者Ephraim George Squire、哲学者で後にYale College学長となったNoah Porter、哲学者・翻訳家Edward J. Young、すでにパリで会っているGeorge Ticknor、画家James R. LambdinとDaniel Huntington、American Academy of Arts and Sciencesの最初の女性会員で、フンボルトが非常に褒めていた天文学者Maria Mitchellなどであった。

1855年第13代アメリカ大統領Millard Fillmoreが銀行家William Wilson Corcoranに伴われて突然フンボルトを訪問し、フンボルトもことのほか訪問を喜んだ。銀行家は1823年に有名な彫刻家Christian Daniel Rauchが1823年に作成した若いときのAlexander von Humboldtの大理石の胸像の複製を作り、ワシントンのCorcoran Gallery of Artに飾ろうとした。さらにCorcoranは1855年にロンドンの画家Emma Gaggiotti-Richardsがベルリンで描いたフンボルトの肖像画を彼のギャラリーのために購入した。その肖像画がワシントンに到着したとき、フィルモアとCorcoranはフンボルト男爵を祝して大祝賀会を催した。

フンボルトとアメリカからの訪問者の話題の中心は、アメリカ合衆国とドイツの将来の関係であった。両国関係は敵対関係ではなく、親密な関係で行けるであろう、というものであった。

科学と移民のパトロン

ヨーロッパで宗教などの理由で恵まれていない学者をアメリカに紹介したり、ワシントンの国立天文台やスミソニアン研究所の創立（1846年）にもフンボルトが関与している。それらの中で有名な者を挙げると、ハーバード大学の比較動物博物館を創設したLouis Agassiz、ミシガン州Ann Arborの天文台長Dr. Bruennowなど、枚挙にいとまがない。逆に、アメリカに亡命してヨーロッパに帰還する者への手助けをもしており、その中にペリーの日本来訪時同行したアメリカの将校Wilhelm (William) Heine がおり、プロイセン王はハイネのプロイセン帰国後に、咎めるどころか、メダルを授与している。

南米ペルー沖を赤道に向かって流れる寒流ペルー海流をフンボルト海流と称するのは余りにも有名であるが、アメリカには50以上のフンボルトと名の付く郡・都市・タウンシップ・湾・湖沼・湿地・山・丘陵・高地・山稜・洞窟・国立公園などがある。実例を若干挙げると：フンボルト川（ネバダ州 470km フンボルト湖に注ぐ）・フンボルト郡（カリフォルニア州・アイオワ州・ネバダ州にそれぞれ一つ）・フンボルト市（アイオワ州・カンザス州・テネシー州）・フンボルト湾（カリフォルニア州太平洋岸の入江）・フンボルト峰（コロラド州 4230m）・フンボルト山脈（ネバダ州大盆地の内部）・フンボルト湖（窪地）（ネバダ州西部）・フンボルト塩湿地（ネバダ州）など。アメリカ以外にも、カナダ・ニューカレドニア・ニューギニアなどにも、フンボルトと名の付く地名がある。これほどフンボルトとアメリカの結びつきは強いものである。

1840年に最初のアレクサンダーの切手がイギリスで発行されて以来、彼の絵入り切手は記念切手

を含めて世界中で、とくに南米諸国で、多数発行されてきた。1959年のフンボルト没後100年に当たる1959年には、西ドイツ・東ドイツ・エクアドル・コロンビア・メキシコ・ソ連・ベネズエラの7カ国で、20種類もの記念切手が発行された。

マサチューセッツ工科大学創設者William Barton Rogersはフンボルトについて次のような言葉で述べている。「地球の物理を構成している諸科学のオーガナイザーであり、コスモスの哲学者の幅広い知識と多面的な観察は驚嘆に値し、科学的探検を2世代以上にも亘って案内紹介してくれる」

V フンボルトとアメリカの大学への影響

1809年、42才の兄Wilhelm von Humboldtはプロイセン内務省教育・文化局長に任命され、プロイセンの臨時首都ケーニッヒスベルク（現ロシア領カリニングラード）（ナポレオンに占領されていたため、プロイセン王はベルリン居住を禁止されていた）に8ヶ月滞在し、ベルリン大学創設と学制の改革に取り組んだ。フンボルトが局長に任命される前に、マッソウ案なる学校制度が実施されることになっていた。それは、農民は農民らしく、都市住民は商工業者として、貴族は貴族にふさわしい教育を学校で行なおうとするものであった。フンボルトの学制改革の理念は、ペスタロッチの精神を取り入れ、彼の覚え書きに次のように記されている。「子供を教育するのに、ただ読み、書き、計算ができるようになればよい、と考えるのではなく、児童の肉体と精神の能力がすべて、よく調和して発達しなければならない。子供が聞き、語り、行うことすべてを、あらゆる瞬間に、なぜそうすべきであって、それ以外のことをしてはいけないのか、十分意識するように指導しなくてはならない。」さらに、1809年12月1日付け、プロイセン国王宛フンボルトの報告書にも、「国民の一人一人が、その職業に関係なく、それ自身一人の誠実でよき人間であり、市民であるときのみ、各人はよき職人であり、商人であり、兵士であり、政治家であり得るのであります。」

フンボルトの旧来の身分制度に応じた教育体系を否定し、教育を万人に開放しようという階級打破的な進歩的な理念に対して、保守的な貴族達からは激しい反発をかった。フンボルトは人文（古典語）系ギムナジウムの創始者として知られているが、その創立理念は二つであった。①古代ギリシャ人が、調和を実現した希な民族であったという意味で、模範とすべきである、②フランス・スペイン・イタリアなど外国で長年過ごした経験から、言語教育を重視すべきである。

初代プロイセン王フリードリヒ一世によって設立されたハレ大学が、ナポレオンの命によって閉鎖され、ベルリンに移して再開すべしとの意見が多かったが、ナポレオンに氣遣ってそれも出来なかった。ナポレオン占領下で軍事力の増強は出来ず、それならばと将来国家を建設するのに有為な人材を育てるために大学を創設しようとの動きが活発となり、フィヒテの「ドイツ国民に告ぐ」の連続講演にも表れていた。フンボルトはケーニッヒスベルクで、国王と何回も面談し、進歩派と守旧派との間を揺れ動く国王の説得にあたり、ベルリン大学設立に努力した。フンボルトは大学運営に国家が介入するのを避けるために、国家予算から運営費を出してもらうのではなく、国有地を大学に与え、その運営費で大学経費を自主的に賄おうというものであった。1810年10月、ベルリンに新しい大学が創設され、61人の学生が入学した。ベルリン大学（第二次大戦後は東ドイツに所属し、

フンボルト大学と改称)が発足したとき、最大の推進者であったWilhelmはオーストリア全権大使としてヴィーンに赴任してベルリンにはいなかった。ベルリンの東西方向の看板通りUnter den Linden北側にあるハインリヒ公の宮殿を校舎にあて、公選された学長フィヒテ、学部長シュライエルマッハー(神学)、創立1周年時には450名の学生数となっていた。Eduard Sprangerはフンボルトの大学の理念を次の3点に要約している。①学問は、哲学体系からみると、一個の統一体をなしているという確信を持つこと、②国立の組織ではあっても、研究・教育・学習の自由が確保されるべきこと、③研究と教育とは不可分であること。わずかの間にプロイセンの他の大学もベルリン大学モデルに改変されていった(写真3)。

Wilhelmの大学創設の理念は、ドイツと同様にアメリカでも受け継がれたが、アメリカ人が彼から直接影響を受けたわけではなく、彼はアメリカの大学から見れば祖父であり、アメリカの孫たちによって受け継がれた。というのは当時19世紀中頃、ドイツの大学で学位を取るアメリカ人が1万人以上もいるという、驚くべき事実を思い起こせば理解できる。ドイツで勉強した彼ら若いアメリカの学者達が、アメリカの大学でリーダーとなり、ドイツ流、正確にはプロイセン流の大学の理念とシステムをアメリカに定着させていった。アメリカ人がフンボルトのベルリン大学に見て取ったものとは、二つの制度・慣行であった: すなわち、科学的探求の自由(freedom of scientific inquiry)と、教育と研究の一体化(the unity of teaching and research)であった。この二つの概念こそはアメリカの大学の改革ではなくて、創設に息を吹き込むことになった。

アメリカ市民戦争(南北戦争1861-65)以前には、アメリカには沢山の古いcollegesがあり、自称universitiesと称していたが、イギリスの伝統を引き継いだもので、学位を授与されることは非

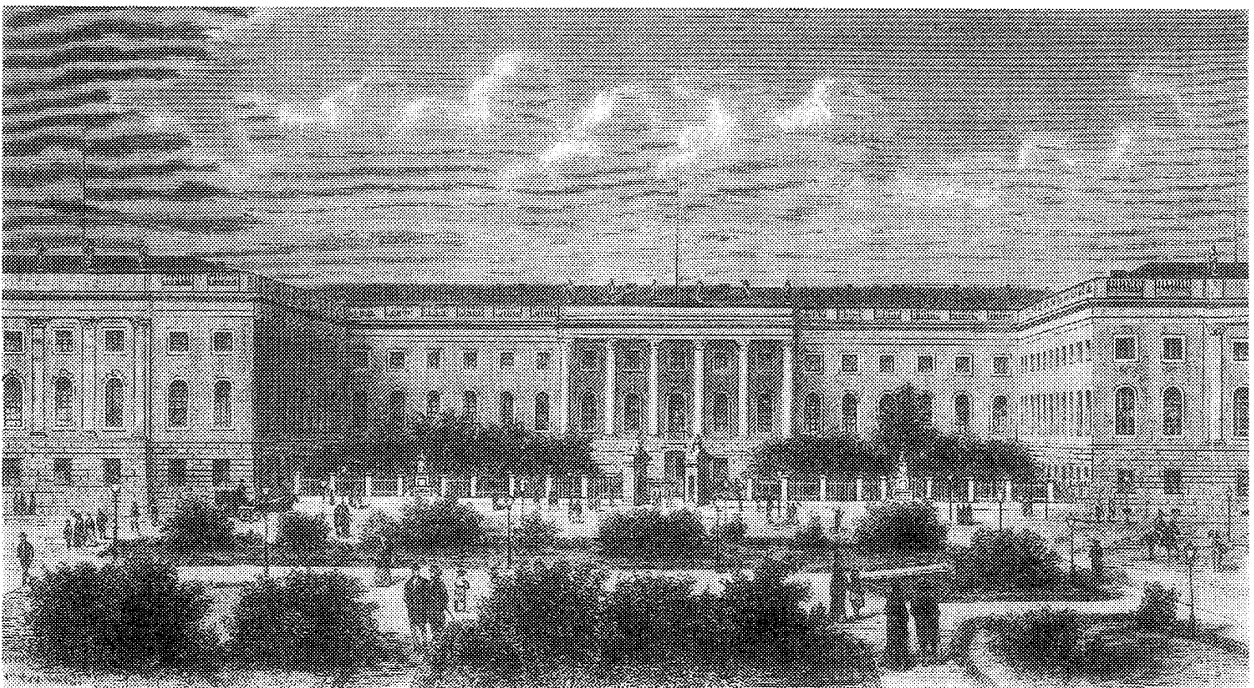


写真3 1883年のベルリン大学 開学73年後の姿 現在とほとんど変わっていない
ベルリンのプロイセン文書館 絵画文庫蔵

常に希であった。当時のアメリカの高等教育は、受け継がれた知識を伝達するもので、研究とはほど遠いものであった。市民戦争後、新たに創設された州立大学を別にすれば、古くて最も有名な colleges はたいてい宗教団体によって設立されていた。1877年にもなって、生物学の教授が、生物を絶対的な神の産物ではなくて、生物学を科学として教えたために Amherst College を免職になった事実をみれば、フンボルト流大学理念が、当時ではいかにラディカルなものであったかが理解できる。

1876年、Johns Hopkins University がメリーランド州ボルチモアに Daniel Coit Gilman (Berlin, 1854) の指導の下で、Wilhelm von Humboldt の理念のモデルで新しいアメリカの大学として創設された (写真4)。それは文字通り、近代的な意味において、アメリカの、アメリカにおける、最初の本当の大学であった。Johns Hopkins の学部はほとんどがドイツで学んだ教授によって構成され、ドクターを授与した。数年経って、Charles William Eliot (Marburg, 1863) が Harvard College を Harvard University に改変し、フンボルトの描いたモデルの大学が全米に広がっていった。

探求の自由と、教育と研究の一体化のアイデアが、なぜそれほどまでにアメリカの若い学者を魅了したのか？ フンボルトの基本的な目的は：“das Prinzip zu erhalten, die Wissenschaft als etwas noch nicht ganz Aufzufindes zu betrachten und unablässig sie als solche zu suchen” (英訳では to uphold the principle that views science not as something already found but as knowledge that will never be fully discovered and, yet, needs to be searched for unceasingly) であった。フンボルトの教育と研究の自由の概念を前面に置いたのは、とりわけ宗教からの自由を強調したものであった。過去に学習されたものよりもむしろ、科学的知識が明らかにされ優先されるべきであ

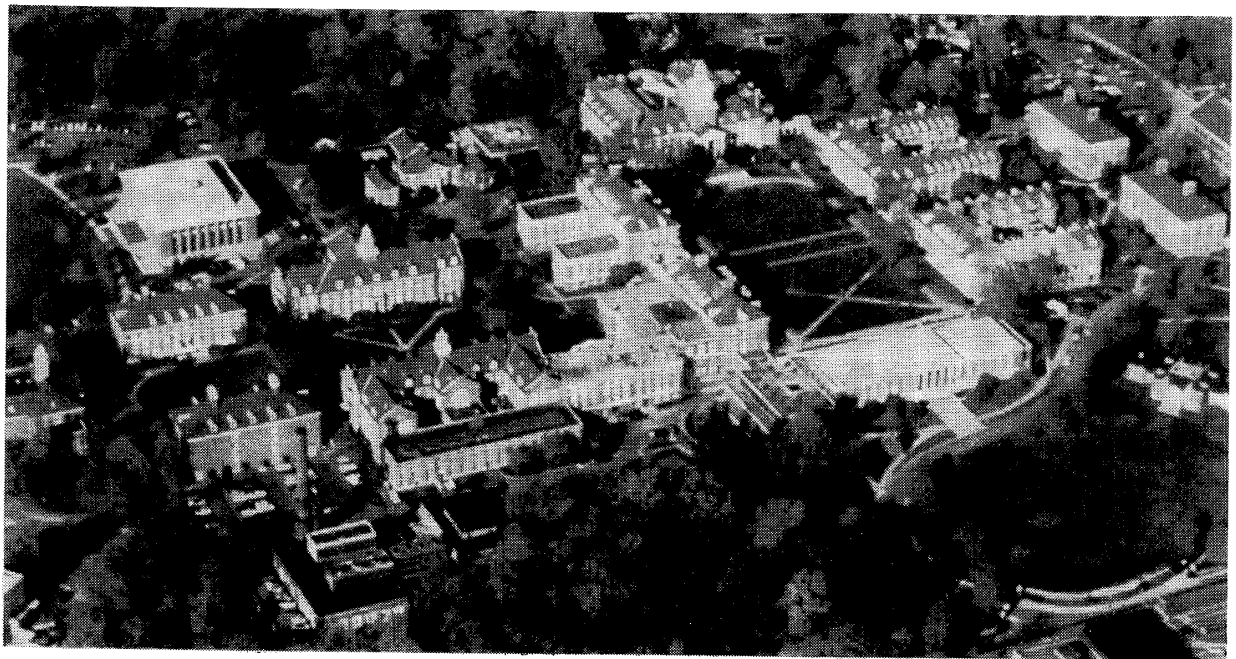


写真4 ボルチモアにあるJohns Hopkins大学 Homewoodキャンパス 1985年
アメリカでのフンボルト型大学第1号

る、などとの観念は、当時としては事実上、異端であった。

Wilhelmが生み育てた大学入学準備教育機関であるGymnasium（9年制高等学校）は、それに似たアメリカのpreparatory schoolは確かに存在したし、現在もあるが、ドイツのようにあまり機能していない。アメリカでは高度の研究は大学院（graduate）で行い、これまでのcollegeあるいは学部（undergraduate）の研究機能は弱く、それらがドイツのGymnasiumの役割を果たしている。逆に、ドイツの大学では学部と大学院とは分離されておらず、一体となっている。アメリカの大学は職業教育的・実利教育的で、人間教育の面でやや弱いように見えるが、最先端の自然科学系の研究では、アメリカの研究大学の方がドイツの大学よりも優れているようにみえる。それはドイツでは最先端の研究が国立の研究所やMax Planck研究所・Frauenhofer研究所などの大学以外の研究所で行われるものが多いからである。Wilhelmが懸念した大学の財政的独立は、アメリカの方がより大きく、ほとんど国立大学であるドイツでは独立性は絶えてなかった。

今日アメリカの主要な研究大学を科学の探求と発見の大きなセンターとして見たとき、大学の伝統は研究機関として、また探求センターとして、わずか2世紀しか経っていない。知識のフロンティアにあって真理を探求する学者達は、研究の自由と研究の一部を教育に向けている。ゴールは知識であり、より新しく、より多くの知識を求め、科学する大学は研究に研究を重ね、すでに明らかになっていること以上の、より新しいことをより高く評価する傾向にある。

大学の理念・形態としては兄Wilhelmのアメリカの大学に与えた影響は決定的なものであったが、大学の教育・研究の内容となると、前述のスミソニアン研究所・ワシントン国立天文台・ハーバード大学比較動物学博物館など、弟Alexanderがアメリカ訪問以来脈々と続けてきた人的交流と知的交流を通して、とくに自然科学の分野でのアメリカの大学への影響は大きい。地理学者・地質学者であり、Yale Collegeの学長Arnauld Henry Guyotはフンボルトの死後数週間で1859年6月2日ニューヨークで行われたアメリカ地理学統計協会の記念セレモニーで過去を振り返り、将来を展望して次のように述べている。「まさにそのような人間は、一人ではなくて、あらゆる国民から待望されていたのかもしれない。偉大にして善良な人間として、彼は人類に属していた。生誕地のドイツは彼の死に至るまでの遺産をもつということを、誇ることができる。」

VI おわりに

1. Alexander von Humboldtの広い学識と交友関係は、修行期にベルリンのサロンに家庭教師に連れられていった養われ、ゲッチンゲン大学時代に当時としては最先端の自然科学の知識を習得し、併せて社会科学やハンブルク商科大学でスペイン語を学んでいる。ベルリン植物園園長Willdenow・Moses Mendelssohn・Georg Forster・ゲーテなどの最高の人物との交友関係から得た知的・社会的財産は計り知れなく大きなものであった。植物の分類とその模写の技術を子供の時から独習していたことも、南米旅行の際に非常に役立っている。
2. ザクセンのフライベルク鉱山学校での学習と鉱山勤務は、その後の南米旅行の基礎を形成するほど貴重なものであったし、60才になってロシア皇帝から中央アジアへの探検旅行を乞われる誘

因も、白金・ダイヤモンド・金などの地下資源探索が主目的であった。

3. 兄とともに母の死によって得た遺産を相続し、それを元に南米旅行を企てる発想が非凡である。親の遺産を相続した貴族は多かったであろうが、新大陸まで行って探検旅行をしようなんて考える貴族は、フンボルトのような広い知識と科学的技術の裏付けと、交友関係が無ければ、とても想定だにできなかったであろう。
4. わずか50日のアメリカ滞在で、終生続いた厚い交友関係と尊敬の念をアメリカとの間に築けたことは、一見して分かるフンボルトの圧倒的な該博な知識と自然に対する取り組む態度、人間的な魅力、若いアメリカに対する好感と期待などを、Jeffersonはじめアメリカの知識人が敏感に感じ取ったためと思われる。彼の生誕100年祭の1869年9月14日の翌日、New-York Timesが一面トップに特集を組むほど、また彼の追悼記念式が全米各地で何万人も参加して、松明行列をするほど超盛大に行われたことは、今日の日本やヨーロッパでは想像も出来ないことである。
5. フンボルトのアメリカの大学に与えた影響は、ヨーロッパから亡命する学者を紹介・橋渡しすることなどにより行われてきた。それ以上にアメリカ上層部とフンボルトとの親密な交友関係を通しての、また俗に「アメリカ要人のパリ・ポツダム詣で」を通しての有形・無形の影響力の方がはるかに大きかった。形式的・外見上は、兄Wilhelmの創設したベルリン大学の二つの理念「freedom of scientific inquiry and the unity of teaching and research」の方がアメリカの大学創設により大きな影響を与えた事は確かである。当時としては、神を絶対視する中世的神学の頸木から、ベルリン大学創設の二つの理念は、大学を解放して自由を与えてくれるものと期待されたからである。

人類最後の総合的科学者Alexander von Humboldtの生涯と業績の大きさに、ただただ圧倒され、驚嘆するのみである。彼は全世界に亘る多くのフンボルト研究者に、尽きることのない研究材料を提供し続けるであろう。

使用文献

- Hanno Back (1958): Das Ziel der großen Reise Alexander von Humboldt. Erdkunde, 12, 42-50.
 Hanno Beck (1959/1961): Alexander von Humboldt.
 Bd I. Von der Bildungsreise zur Forschungsreise, 1769~1804.
 Bd. II. Vom Reisewerk zum "Kosmos", 1804~1859. Franz Steiner Verlag Wiesbaden.
 日本地理学会 (1959): Humboldt Ritter 100. AJG 1959, 30頁.
 野間三郎 (1959): A. v. フンボルトの植物生態学的研究. 地理, 4-3, 23-32.
 西川 治 (1959): ゲーテとA. v. フンボルト. その影響. 地理, 4-3, 33-46.
 岩田慶治 (1959): A. v. フンボルトと地理学. 地理, 4-3, 47-56.
 八杉竜一 (1959): フンボルトとダーウィン. 地理, 4-3, 57-62.
 アレクサンダー・フォン・フンボルト 前島郁夫訳 (1959): コスモス・序論的考察. 地理, 4-3, 79-86.
 Kurt Kusenberg (1967): Alexander von Humboldt. Rowohlt Taschenbuch Verlag GmbH, S.189.
 Heinrich Pfeiffer für die Alexander von Humboldt-Stiftung (1969): Alexander von Humboldt Werk und Weltgeltung. R. Piper & Co Verlag München, S. 505.

- Peter Schoenwaldt (1969) : Alexander von Humboldt und die Vereinigten Staaten von Amerika. In "Alexander von Humboldt Werk und Weltgeltung", Piper & Co Verlag München, 431-482.
- H. Wilhelmy, G. Engelmann und G. Hard (1970) : Alexander von Humboldt Eigene und Neue Wertungen der Reisen, Arbeit und Gedanken. Geographische Zeitschrift, 23, Franz Steiner Verlag Wiesbaden. S. 73.
- 大森道子 (1971) : アレクサンダー＝フォン＝フンボルトとゲーテ. 立正大学教養部「紀要」, 4, 63-87.
(Alexander von Humboldt : Kosmische Naturbetrachtung, Kröner 1958 序論のフンボルト像と、Goethes Briefe 1-4 Bd. Hamburger Ausgabe 1962-7のフンボルト宛手紙の翻訳)
- エッカーマン 山下 肇訳 (1971) : ゲーテとの対話 (Goethes Gespräche mit Eckermann) 上・中・下. 岩波書店.
- Peter Schoenwaldt (1976) : Alexander von Humboldt and the United States of America. Aktuelle Informationen für Mitarbeiter und Freude der Max-Planck-Gesellschaft, 2-76, 13-20.
- 亀山健吉 (1978) : フンボルト. 中央公論社, 270頁.
- Hanno Beck (1979) : Zur Alexander von Humboldt-Forschung VII. Briefe Alexander von Humboldts an den Historiker Friedrich von Raumer. Alexander von Humboldt Stiftung Mitteilungen, 36, 20-22.
- Halina Nelken (1980) : Alexander von Humboldt Bildnisse und Künstler Eine Dokumentierte Ikonographie. Dietrich Reimer Verlag Berlin, S. 179.
- Hellmut Hanle (1981) : Zur Alexander von Humboldt-Forschung IX. Alexander von Humboldt auf Briefmarken. Alexander von Humboldt Stiftung Mitteilungen, 39, 29-40.
- Hanno Beck (1982) : Zur Alexander von Humboldt-Forschung X. Landschaften, Profile und Karten aus Alexander von Humboldts Atlanten zur amerikanischen Reisewerk. Alexander von Humboldt Stiftung Mitteilungen, 40, 31-38.
- 大森道子 (1982) : アレクサンダー・フォン・フンボルト. 「ゲーテ年鑑」 24, 177-198.
- Louis L. Snyder (1985) : Zur Alexander von Humboldt-Forschung XII. The Alexander von Humboldt Monument in New York City. Alexander von Humboldt Stiftung Mitteilungen 46, 26-31.
- 佐々木 博・田村百代訳 (1986) : Hanno Beck 「Alexander von Humboldt研究史」 および 「Alexander von Humboldtの談話」. 人文地理学研究, X, 189-224.
- Steven Muller (1986) : Wilhelm von Humboldt and the University in the United States. Alexander von Humboldt Stiftung Mitteilungen, 47, 25-28.
- Kurt Schleucher (1988) : Alexander von Humboldt. Preußische Köpfe Wissenschaft, Stapp Verlag Berlin, S. 165.
- ピエール・ガスカール著 沖田吉穂訳 (1989) : 探検博物学者フンボルト. 白水社, 244頁.
- 手塚 章 (1991) : 地理学の古典. 古今書院, 422頁.
- 手塚 章 (1997) : 続・地理学の古典, フンボルトの世界. 古今書院, 378頁.
- Hanno Beck (1997) : Alexander von Humboldt. Die Forschungsreise in den Tropen Amerikas. Teilband. 1-3. Darmstadt. (Alexander von Humboldt. Studienausgabe. 7Bde. Bd. II)
- Wolf Lepenies (1999) : Alexander von Humboldt—his past and his present. Alexander von Humboldt Stiftung Mitteilungen, 74, 5-16.
- Margot Faak (1999) : Alexander von Humboldts Amerikareise. Alexander von Humboldt Stiftung Mitteilungen, 73, 41-46.
- John S. Edwards (1999) : Humboldt's South America Today. Alexander von Humboldt Stiftung Mitteilungen, 73, 47-52.
- Nicolaas Rupke (2006) : Der vielfache Humboldt. Alexander von Humboldt-Stiftung kosmos, 87, 34-39.